

称号及び氏名	博士（言語文化学）	金 知垠
学位授与の日付	2023年3月31日	
論文名	日韓の対人関係に関わる言語行動の相違とコミュニケーション摩擦	
論文審査委員	主査	西尾 純二
	副査	高木 佐知子
	副査	楊 眞淑

#### 博士（言語文化学）学位論文要旨

日本語と韓国語は類似している点が多く、その共通点の多さから両言語の微妙な違いが看過されることがある。ところが、その違いが認識できないまま母語の言語行動様式によって相手の言語を運用すると、意図せず相手に違和感や不快感を与え、コミュニケーション摩擦につながることもある。

本論文は、このような日韓両言語の違いが接触場面で誤解・摩擦の要因になるという立場で、対人関係に関わる言語行動における日本語と韓国語の相違を明らかにしたものである。

日韓両言語では構造的側面は類似するが、運用的側面で相違が見られる言語行動がある。この相違は両言語話者の接触場面でコミュニケーション摩擦の要因になるが、それが認識されにくい場合がある。第1章では、このような言語行動における日韓の相違を明らかにし、コミュニケーション摩擦の観点から考察することが本研究の目的であると述べた。

第2章では、日本語と韓国語の言語行動を対照する先行研究を概観した。そして、先行研究の分析対象と研究方法を踏まえたうえで、コミュニケーション摩擦の要因と認識されにくい言語行動において、語、発話、会話・談話という異なる言語的単位のデータを用い、多岐にわたる言語事象を観察するという研究方針を示した。

第3章では、言葉づかいや話し方のマナー本から、日韓の社会通念的な言語行動観の異なりを語、発話、会話・談話レベルの言語事象に分けて見た。

まず、語の選択レベルにおいては、日本のマナー本では「若者言葉」の使用が、韓国のマナー本では「方言」の使用が否定的な評価を受けること、両言語に似た「呼称」でも異なる使い方をすることが分かった。次に、発話レベルにおいては、日本のマナー本では「依頼」や「断り」の際、相手への配慮を言語化する必要性が助言されていた。そして、「ほめ」の対象や事柄については、両国のマナー本に異なる認識が見られた。最後に、会話レベルにおいては、避けるべき「話題」の種類が韓国のマナー本より日本のマナー本で

多かった。また、プライバシーに関わるとされる事柄については、両国のマナー本に異なる認識が見られた。そして、日本のマナー本はあいづちの表現を、韓国マナー本はあいづちの頻度を、留意点とするといった違いが見られた。

第4章では、韓国ドラマの韓日対訳から、相手に呼びかける呼格的用法の対称詞（以下、呼格的対称詞）の日韓の異なる使用状況について見た。

日本語版では呼格的対称詞の使用率が低く、このことから日本語での呼格的対称詞の使用規制の強さが推定された。その使用規制は、人名類と職業・地位名称類に比較的弱く二人称代名詞類と卑罵表現類に強かった。そして、日本語版では呼格的対称詞を代名詞の用法に置き換え、相手への過剰な関与を軽減する方略が観察された。また、二つの対称詞を連続して使う重ね用法が用いられる場面や、非親族に使う虚構的用法の親族名称の使用範囲など、両言語版で呼格的対称詞の異なる用い方が確認された。

第5章では、韓国ドラマの韓日対訳から、目前の相手に丁寧さを表す対者待遇表現の文体使用について見た。

両言語版の文体の対応関係を調べた結果、日本語版では韓国語版に比べて普通体と文体省略体の使用が多く両言語版の文体はほぼ5発話中1発話がずれていた。まず、韓国語版の普通体が日本語版で丁寧体に翻訳されるケースのほとんどが、女性の推量形と命令形の発話であった。このことから、日本語では女性が推量・命令形を普通体で話すことに強い規制がかかると推定された。また、韓国語版の普通体が日本語版で文体省略体に翻訳される要因として、日本語の文体省略体が丁寧さを調節する機能を持つことが考えられた。そして、韓国語版の丁寧体が日本語版の普通体に翻訳される場合が、両言語の文体がずれる最も多いタイプであるが、その要因として、韓国語の丁寧体「해요体」のやわらかい語感を日本語の丁寧体では表しにくいこと、未成年者や上位者という話者の属性、話者の心理状態、翻訳上の問題などが考えられた。

第6章では、ロールプレイ方式の面接調査から、不快感を与えられた相手の「話しかけ」とその「応答」という隣接ペアの成立傾向とマイナス評価表出の仕方について見た。

日本語話者の回答者は不快感の強弱に関わらず、隣接ペアの成立傾向が強かったのに対して、韓国語話者の回答者は隣接ペアの成立傾向が弱かった。また、日本語話者の回答者は上下・親疎関係を問わず、隣接ペアが成立する傾向にあった。いっぽう、韓国語話者の回答者は親しい間柄で隣接ペアが成立しない傾向にあり、隣接ペアの不成立が親しい関係の維持に大いに影響しないと推定された。そして、韓国語話者の回答者は、年上に対する微弱なマイナス評価表出の補償的手段として、隣接ペアの発話連鎖型における等価性の変化を用いると推測された。そのほか、韓国語話者の回答者は、発話連鎖型の等価性の変化によるマイナス評価表出の傾向が、親しい間柄において強いことが見られた。

第7章では、第4章から第6章までコミュニケーション摩擦の要因として指摘した言語行動について、日本語母語話者(Japanese Native Speaker 以下 JNS)と韓国語母語話者の日本語学習者(Korean native speaker in Learning Japanese 以下 KLJ) にアンケート調査を行

い、そのような言語行動がコミュニケーション摩擦の要因になるかを検証した。

まず、呼格的対称詞の結果を見ると、非親族に使う虚構的親族名称は、KLJの評価がJNSより悪く、摩擦の要因になりにくいと判断された。しかし、親しい間柄での二人称代名詞の使用は、JNSの評価がKLJより悪く、摩擦の要因になりやすいと判断された。また、プラス感情の状況で二つの対称詞を連続して呼びかける重ね用法の使用においても、JNSの評価がKLJより悪く、摩擦の要因として考えられた。次に、丁寧語の選択の結果を見ると、未成年と上位者の普通体使用は、KLJの評価がJNSより悪く、摩擦の要因になりやすいと判断された。いっぽう、心的要因による下位者の普通体使用は、KLJの評価がJNSより悪いが、摩擦の要因としてそれほど懸念することはないと考えられた。最後に、隣接ペアの結果を見ると、親しい間柄でも隣接ペアが不成立になる場合や、等価性がなく成立する場合は、JNSの評価がKLJより悪く、摩擦の要因として考えられた。

以上、本論文では、コミュニケーション摩擦の要因として認識されにくい言語行動において、日韓両言語の運用的側面の相違を明らかにし、それらがコミュニケーション摩擦の要因になることを実験的に検証できた。今後は、接触場面での誤解・摩擦の現象を扱い、日韓間コミュニケーション摩擦の実態を把握することを課題に残す。また、コミュニケーション摩擦の要因は複数の言語要素が複合的に関与するという観点からそのメカニズムを解明していきたい。

#### 【初出一覧】

本稿の一部は、以下にあげる各稿を基にして、これらを加筆・修正したものである。

「話しかけへの応答からみるマイナス評価表出の日韓比較－隣接ペアの成立と相互作用を中心に－」『日本語学研究』 54 韓国日本語学会 2017 pp.17-29

「韓国ドラマの日本語訳から見る日本語における呼格的用法の対称詞の使用規制」『日本語学研究』 68 韓国日本語学会 2021, pp.5-19

「マナー本からみる日本と韓国の言語行動規範の比較」『言語文化学研究』 17 日本語日本文学編 大阪府立大学人間社会システム科学研究科 人間社会学専攻言語文化学分野 2022, pp. 45-77

「対者敬語を表す文体における日韓比較韓国ドラマの韓日対訳から見る文体使用の違い－」

『日語日文学研究』 123 韓国日語日文学会 2022 pp.3-23

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

### 1 この論文の位置づけと意義

本論文は日本語と韓国語において、産出した発話文が文法的には正しいにもかかわらず、コミュニケーション摩擦の誘発要因になってしまう言語行動について、その内容と対人関係への影響を明らかにしようとするものである。このような目的で行われる研究には、接触場面で円滑なコミュニケーションを行うための知見を提出するという点において、意義が認められる。

また、本研究は「コミュニケーション摩擦の誘発」という言語行動の（非意図的な）効果を観点の中心に据え、そこに関与する言語行動を捉えようとする点、ユニークなものである。対人関係の維持構築という「目的を達成できないケース」のありようを捉えようとする本研究は、impoliteness 研究とも一線を画す。語用論的な負の転移についての研究との親和性があり、両言語の言語行動の相違を見いだしつつ、その特徴を描き出す、対照言語行動論的な性格が強い。

このようなアプローチからは、多種にわたる言語事象を分析考察の対象として扱う必要がある。それぞれの事象ごとに、データ収集や分析の方法が異なるため、複数の手法によるデータ収集を行い、分析方法についても新たな手法を開発する必要があったが、その分、挑戦的であったと評価できる。

### 2 この論文の概要

この論文は以下の 8 つの章から成っている。本研究の特色が、どのような内容で構成されているかを紹介する。

第 1 章 はじめに

第 2 章 先行研究と本研究の方針

第 3 章 対人関係のための言語行動規範

—マナー本から見る望ましい言葉づかい—

第 4 章 対称詞の使用に関する言語行動

—ドラマの韓日対訳から見る相手を指し示すことば使い—

第 5 章 対者敬語を表す文体に関する言語行動

—ドラマの韓日対訳から見る文体の対応関係—

第 6 章 隣接ペアの成立に関する言語行動

—話しかけへの応答から見るマイナス評価表出—

第 7 章 対人関係に関わる言語行動への評価

—日本語母語話者と日本語学習者の比較—

第 8 章 まとめ

第1章では、日本語と韓国語が言語構造上の類似点を持ちながら、誠意をもって話しても誤解やトラブルが生じることが多いという、従来から散見される指摘を取り上げ、研究の目的として設定する。第2章では、日韓の言語行動に関する対照研究についての先行研究が紹介され、この研究で扱うべき言語事象や研究の方針について述べられる。第3章は日韓の言葉づかいに関するマナー本で取り上げ、両言語で社会通念として意識される言葉づかいのマナーの違いを見いだすことを試み、その具体相を明らかにした。

第4章と第5章では、韓国語原版のテレビドラマとその日本語訳版において、原版の韓国語版から日本語に訳される際の翻訳のずれが抽出され、分析対象となる。そして、翻訳にずれがある言語事象のうち、対人関係に影響を及ぼしやすいと考えられる、呼格的用法の対称詞や丁寧体・普通体といった言語事象を、それぞれの章での分析対象とし詳細な運用の違いが分析された。

第6章は、ロールプレイの方法によって、会話の中での原則である「隣接ペア」の構成について観察している。この調査結果によって、韓国語の会話では、日本語と異なり、相手からの挨拶に対して、挨拶を返さない頻度が高いことなどが分析の結果として示された。

第7章は、第3章から第6章で運用法に顕著な違いが明らかにされた対称詞や文体、隣接ペアと言った言語事象について、筆者が作成した日本語スクリプト（テキスト）を、日本語母語話者（JNS: Japanese Native Speaker）と韓国語を母語とする日本語学習者（KLJ: Korean native speaker in Learning Japanese）に評価してもらった回答を分析している。この実験的調査においても、言語事象に関する様々な評価の諸相が明らかになった。

第8章は、全体の成果をまとめ、今後、解明すべき課題を示している

### 3 この論文の評価

この論文の評価について、審査基準に基づいて以下に述べていく。

#### 1) 研究テーマが絞り込まれている

この論文の研究対象はコミュニケーション摩擦を誘発する言語行動である。様々な単語の選択、文体選択、隣接ペアなどである。語の選択から文体、会話事象と扱われた事象は拡散しているが、いずれも「コミュニケーション摩擦を誘発する」言語行動について分析するという点において、テーマは絞り込まれている。テーマとしての一貫性は明白である。

#### 2) 研究の方法論が明確である。

扱う言語事象の違いにより、調査・分析の方法論は異なっている。本論文では、マナー本の分析、テレビドラマにおける語や文体の分析が3章から5章において行われ、そこで明らかになった日韓の違いについて、第7章でJNSとKLJの意識・評価がコミュニケーション摩擦との関係で調査される。個別の事象のデータを収集・分析する方法論は異なるが、論文全体としての立論方略は明確である。

3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

先行研究についての調査は、主に第 2 章が中心となっている。後に行われる調査と分析のデザインを下支えする待遇表現行動やポライトネスの理論を踏まえ、関連する言語行動の日韓対照研究の成果が多く示された。その結果として、対称詞・文体選びや隣接ペアといった面において、研究の余地があることを理解するに至っている。全体として、十分な先行研究の知見が踏まえられたうえでの研究となっている。

4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

文献調査、作品調査、ロールプレイ調査、WEB 質問調査など、それぞれの章で議論に必要なデータが収集されており、それらが論拠の一つとなっている。また、データを分析する際には、関連する先行研究の指摘を踏まえている。先行研究の知見に自身の調査結果を関連付けるというスタイルでの記述が多く、新しい知見を提出するにあたって主張の正当性を補強するものとなっている。その際の論理展開も概ね妥当と言える。

5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

個別の分析結果には、JNS や KLJ に予想できないような意外な内容のものが含まれる。意外な「コミュニケーションの摩擦」の誘発要因を指摘することは、今後、摩擦の誘発にまで至るプロセスを追究という新たな課題を提示するとともに、筆者が第 8 章で述べたように、日本語教育・韓国語教育とその研究に資するものであろう。

またやはり、「コミュニケーション摩擦の誘発」という言語行動の（非意図的な）効果を観点の中心に据えるところから研究が展開し、論文内で問題発見、詳細の整理、摩擦の検証という完結性を持たせている点、独創性があると評価ができる。

対人関係を維持構築するコミュニケーションのルールの追究だけでなく、そのルールから逸脱し、誤解・摩擦を生じさせるという現象に着眼する研究は、未だ多くない。様々な事象レベルにおける言語行動のルールからの逸脱は、個別言語のコミュニケーションの性質をより詳細に理解するために貢献するものと評価できる。

#### 4 審査委員会の結論

最終試験での主査・副査による口頭試問を行った結果をふまえ、本審査委員会は、この論文が人間社会システム科学研究科人間社会学専攻言語文化学分野の博士論文審査基準を、上に述べた内容ですべて満たすと判断し、博士学位の取得にふさわしいものであると結論づけた。